

SKYMENU 活用授業 実践レポート

お名前	新居 逸郎	学校名	昭島市立つつじが丘小学校
実施学年	第6学年	教科	学級活動
单元名	学級活動(1)ア 学校や学級における諸問題の解決「学級集会をしよう!」		

《学びを深めたいポイント》

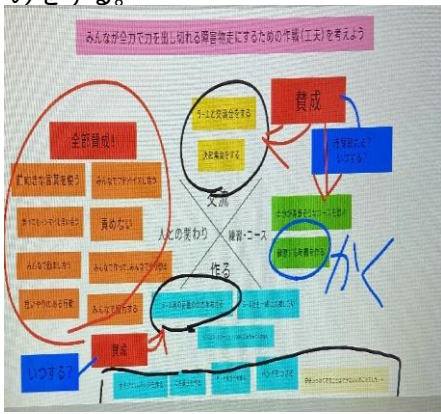
本学級の児童は今までに、「クラスキャラ作り」「クラス旗、クラスタオル作り」「新しい遊び」「学級集会」など多くの活動を学級会で話し合って決めて取り組んできた。それぞれの活動を学級全員で一致団結してやり遂げることで、達成感や一体感を味わうことができた。児童は、これらの経験を通して「学級目標」の一つである「つながる」を特に意識して生活するようになった。すると児童は、授業中や日常生活で相手を大切にするため、「聴き手としてリアクションをする(反応する)」ことを大切にしようとするようになった。国語科「みんなが楽しくすごすために」では、「リアクションをすることで学級がよりよくなる。」と提案する児童が多くいた。そこで、学級全体で話し合い、みんなが自分に合ったリアクションをよりよくできるような学級集会「6-1フェス!リアクションしてるー?」を行うこととなった。

提案理由や話し合いのめあてをもとに、自分の考えを伝え、一人一人の考えのよさを生かしながら、合意形成ができることを期待する。

《SKYMENU 活用のポイント》

スカイメニューの「発表ノート」を活用した。オンラインホワイトボード上で整理・分類された意見を発表ノートにまとめることで、みんなの意見を把握しながら自分の意見を考えることができる。また、発表ノートでは、様々な思考ツールを扱える。話し合う内容に合わせて思考ツールを活用することで、自分の考えをさらに深めていくことができる。実際に、配布された発表ノートを見ると、児童は自分の考えを書き込んだり、意見に合わせてノート作り変えたりしている。これにより、児童は提案理由に沿って自身の考えをより深めることができるようになった。また、自分の意見をもつことが苦手児童は出されている意見をいつでも確認できたり、意見が整理・分類されたりしていることで、賛成・不安や心配の意見を考え易くなり、学級会に参加する意欲になった。児童の振り返りには、「みんなの意見が見られて、自分の意見を考えやすかった。」「発表が苦手だったけれど、同じ考えの人がいると分かって発表しやすくなった。」「発表していない人の意見も知ることができるから、みんなの納得できる意見を考えることができた。」など肯定的な振り返りがされていた。

《実践内容》

	学習活動	SKYMENU 活用場面	活用のポイント
導入	1 始めの言葉 2 司会グループの紹介 3 議題の確認 4 提案理由の確認 5 話し合いのめあての確認 6 決まっていることの確認	○提案理由の深化と共通理解のために活用  ○「学級会ノート」として、出されている意見を整理分類して配布する。 	◇話し合いの拠り所になる「提案理由」だが、曖昧な表現になることもある。そのため、発表ノート内にある思考ツールを活用して、提案理由の深化と共通理解を図ることで、話し合いがよりよく進むようにする。 ◇手元に意見が整理分類されているノートがあることで自分の意見をもって、学級会に参加したり、発言したりし易くする。
展開	7 話し合い 話し合うこと① 「どのような工夫をするか。」 話し合うこと② 「役割分担をしよう。」	○「学級会ノート」を自分の意見や友達の意見をもとに、自身で書き込みをする。  	◇話し合いの流れに合わせて、自分で発表ノートの中身をデザインしていくことで、提案理由に沿った合意形成につながるようにする。

ま と め	8 決まったことの発表 9 振り返り 10 先生の話 11 終わりの言葉	○発表ノートを活用して、振り返りを行う。 	◇発表ノート内に振り返りの視点を載せておくことで、特別活動で育てたい資質能力に沿って振り返りができるようにする。また、提出したものを児童同士で見合える設定にすることで互いの頑張りや良さを共有することができる。
-------------	---	--	--

「実践を振り返って」

成果

ICT を活用することで、教室や自宅など、場所が関係なく学級活動を行っていくことができた。誰一人取り残すことなく学習の機会を保障することが教科学習だけでなく、特別活動でもでき、育成を目指す資質・能力の向上が見られた。

また、学級の課題として挙げられていた学級会で話合いが深まりきらないこと、振り返りを共有し次の活動に生かすことや人間関係の形成、学級への所属感につなげることをスカイメニューを活用することで解決していくことができた。

課題

低学年から高学年に向けて系統的に ICT 活用のスキルを身に付けされていくことが必要だ。また、タブレット端末の操作は教師間でも経験やスキルの差が生まれやすい。どの教師も扱うことができるように実践を一般化していく。

今回の実践を通して ICT を活用することで全ての児童が学びに参加できること、アナログとデジタルのよさを組み合わせていくことで学習がさらに深まっていくこと、を実感することができた。これからの時代の変化に合わせて、学び方も変わってくることは必然である。そのため、まずはこの予測困難な状況に教師一同で知恵を合わせて対応し、未来の社会を創る子供たちにとってよりよい学びの場を提供していきたい。本実践がその一端になれば幸いである。これからも子供たちの成長を願い、私自身も子供たちと共に成長していく教師である所存である。